

白居易（楽天）疾病攷

小高修司

〔要旨〕詩作により、白居易は多病であったことが知られている。従来、中医学の見地から疾病を分析研究されることは少なく、誤解も多々見られる。身心の背景因子の分析に基づき、疾病及び老化に関する考察を行い新知見を得た。とくに母親から得るべき先天の腎精不足が考えられ、後天的には種々のストレスによる肝氣鬱結が多くの疾病の病因となった。また後天の本である肺や脾胃の不十分な働きのために、氣血津液の産生が不足したことも基礎病因となった。眼症状、風痺の病、肺疾患について分析を行い、更に早老についての検討も行った。

キーワード——肝鬱化火、木火刑金、風寒湿邪、腎精不足

中唐の代表詩人である白居易は詩作によれば多病であった。勿論これはあくまで公表を考えた作品によるもので事実の歴史考証ではないのだが、この点に関しては今までいくつかの論が為されている⁽¹⁻³⁾。ただ中国医学の観点からすると意見を異にする部分がある。この問題を論ずることで中唐の疾病史の一端を語れば望外の喜びである。

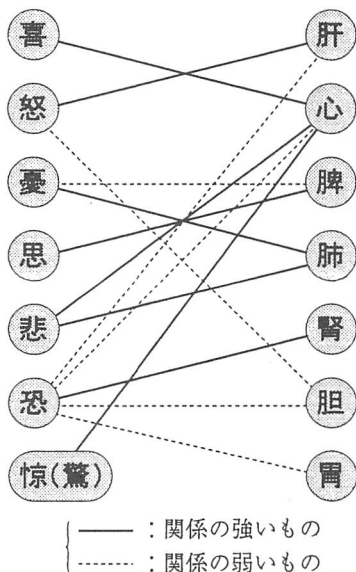
基礎的な事歴

先人の研究をもとに白居易の事歴を通して體質を考えてみる。祖父は六十八歳、父は六十六歳、母は五十七歳で亡くなっている。白居易は蒲柳の質であったと自述しているが、「先天の本」が不足していたとすれば、問題は母親にありそうである。

母は十五歳で詩人でもある父に嫁ぎ、十八歳で白居易を生んでいる。長兄は居易が四十六歳の時死亡、三弟は居易が五十五歳の時、つまり両者共に五十歳前後で亡くなり、更に四弟は九歳で夭折している。兄弟の年齢から考えれば、十六、七歳で初産であろう。『医心方』卷二十一に『小品方』云うとして「今は、婦人が早婚なので、腎の根本がまだしっかりしないうちに子を産み、腎を損傷してしまう。それゆえ今の婦人が病むと、必ず難治となる」とある通りである。当時の生活環境、栄養状態から考えれば、若年での出産や多産は、「心疾」で亡くなったと伝えられている母にとってかなりの負担であったと考えられる。心疾とは何か、中医学で云う「心」とは必ずしも心臓病のことのみを意味しない。心の病である可能性を否定できず、謝思焯『白居易集綜論』には、不幸な結婚・九歳の子供を亡くしたこと・生活苦などによる、重い鬱病があったことが指摘されている。⁽⁷⁾ 鬱病を発症する基礎體質として、心肝の氣血不足が考えられる。こういった氣・血・津液の不足状況が考えられるにもかかわらず、四人も出産したことは当然大きな負担であったろうし、本人の傷腎の結果として子供達が十分な先天の精氣（腎精）を与えられなかったことも考えられる。特に第四子の早逝はその感を強くする。

彼を一流の教養人に育て上げた最愛の母であり、しかも十分な孝行が出来なかったことを嘆く様は「慈烏その母を失い、啞啞と哀音を吐く。」（『白居易集』卷一慈烏夜啼⁽⁸⁾）に明らかである。

居易は父を二十三歳の時亡くし、更に母を四十歳で、しかもこの年は愛娘を続いて亡くしている。彼の生涯は二十一



七情と臓腑の関係

図 1

歳の時に第四弟を亡くして以来、親族・友人と実に多くの死と関わっている。当然このことが自分の体弱と相まって、無常観を抱くに至ったこと、さらに母と娘を亡くしたときの作詞「四十にして未だ老を爲さざるも、憂に早衰を傷らるを悪む。前歳には二毛生じ、今年は一齒落つ。形骸日に損耗し、心事同じく蕭索たり。」(巻十自覺二首)⁽⁹⁾に見られるように、憂悲による肺の損傷(憂悲傷肺)を初めとする五臓六腑の傷害(つまり「七情内傷」を引き起こしたことは十分考えられる。こうした先天の精

氣不足の上に、更に飲酒と後述する仙薬(外丹)の習慣的服用、それに時代背景として政治抗争、戦争内乱、貧窮する庶民への慈愛の心とそれに伴う自己能力の限界に対する怒りなどが複雑に関わっている。悲哀のみならず、怒り、恐れ、悩み煩う、思い悩む、憂い、実に多用な感情の嵐に見舞われていたと想像でき、これは七情内傷を起こし、殆ど全ての臓腑に影響を与えていたと考えて良いであろう(図1)。五臓六腑は相生相克の関係で相互に密接に関連しており、当然ながら種々の疾病を引き起こす可能性があったことになる。

彼の生涯は大きく三段階に分けられる。

第一段階は生誕時より江州に貶謫された四十四歳(元和十年)まで。進士に累した後自校書郎を手始めとして官吏への道を進み、希望に燃え「貞観の治」を理想として、積極的に政治改革の意見などを表示していた。元和十年正月、節度使の反乱をきっかけとして戦争が始まり、更に六月には宰相が暗殺され、これを機に居易は書奏したが、これが旧官僚の恨みを買い、讒言され流謫されることになる。このときの心痛は甚だしいものであった。この時の詩作は多いが、そ

の翌年書かれたのが名作「琵琶行」（卷十二¹⁰）である。

第二段階は四十五歳（元和十一年）より五十七歳（大和二年）まで。この間、江州司馬、忠州刺史、中書舎人、杭州・蘇州刺史と刑部侍郎と歴任し地位も上がり、思想的にも激情が潜み、儒家の宿命論、懐疑的な心情のもとに、道教・仏教に多大の慰藉を求めるようになる。「即事詠懷、題於石上」（卷七¹¹）等の作詞がある。この間も幾多の疾病、さらには落馬事故もあつた。五十五歳（宝曆二年）敬宗殺害事件に端を発する二季の党争に居易は大きな精神的苦痛を感じ、病と称して免官を願ひ出ることになる。

第三段階は、七十五歳（會昌六年）で死亡するまで。洛陽に帰り、晩年の十八年間は比較的閑官に過ごし、詩酒、琴書、礼仏、修道など常楽の精神を知足した。「若し樂天に病を憂うこと否からんか（と問えば）、樂天命を知ること了り憂い無し」（卷三十五枕上作）に見える「知足」の思想は、儒家の「達人知命」と道家の「知足不辱」を包涵する。三教の関わりについては次段で詳述する。

儒仏道三教の関わりについて

中唐の士大夫階級に属するものとして、白居易の基礎教養は儒教であるが、漢魏晋以降、儒仏道三教調合の傾向は一般的であり、彼もその影響下にあつたといえる。

人生第一期には、社会改革に情熱を抱き、搾取されていた農民の疾苦に同情し、儒家の「百姓足、君孰不足。百姓不足、君孰與足。」という思想が影響した。儒家の基本思想である「仁恕」のもとに、彼らに最低の物質生活を保障したいと主張し、忠州、杭州、蘇州の刺史時代には生産向上の為に水利事業を行い、税負担の軽減などに配慮した治世であつた。任地より移動の際は、その都度、多くの人民が別れを惜しんだという。

進士に及第し洛陽に赴くとき凝公大師と結識したのが仏教と直接縁が出来た初めであろう。そして三十九歳、母と娘

が病死したとき、「我浮屠の教えを聞き、中に解脱の門有り」(巻十自覺二首の二)⁽¹²⁾と、仏教(浮屠教)に心を寄せている。上述したように四十四歳、江州に貶謫される時、仏心は一層高まる。杭州刺史の時は仏教寺院が多い土地柄、積極的に名刹を訪問し談禅論道した。五十八歳以降は疾病、友人達の死去のため仏事に関わる事が多く、解脱を求め多額の喜捨も行った。詩作、嗜酒と共にこういった仏教による安心立命がなければ、居易の身心の破綻はもつと早くに訪れていたであろう。

ただ津田が指摘しているように、居易の仏教思想は同時代の詩人達と同じく、生死を大事とし生死を解脱すべきと説く仏教思想ではなく、死生を齊しく見るのも、共に忘れるのも、解脱を求めることではなく、生を空としてそれに執着しないという考えから来ている。前記した「自覺二首」の二(巻十)の後半部分に明らかである。実はこの考えは『莊子』などに説かれている道家のそれである。仏教を道家の目で見ていたのである。道家の語によって仏教の思想を説くことは両晋時代からであるが、その両者の様々な結びつきの影響下にあるといえよう。「逍遙詠」(巻十二)の逍遙の語が『莊子』から来たものであるのは明らかであり、また「題贈定光上人」(巻九)⁽¹³⁾には『莊子』の言葉が使われている。官禄名利の世界を離れ、仏教を隠逸思想に結びつけると共に、道家的老荘的な人生観と死生観によって仏教を見ることになったと云える。⁽¹⁵⁾

さて次に健康問題の観点から道教との関係を考える。唐の王朝が李姓であったことから、同姓の李耳(老聃)を太上玄元皇帝と崇めたため、唐代に道教は大いに発展し、読書人にとって『老子道德経』『莊子』は基礎教養であった。「仲夏齋戒月」(巻八)⁽¹⁶⁾にも明瞭に出ているが、道教の重要教義の「齋戒」以上に彼の興味を引いたのは服食と外丹による不老長生である。「不二門」(巻十一)⁽¹⁷⁾に「兩眼日に將に暗く、四肢漸く衰瘦す。……亦た曾つて大薬を焼き、乖火候を消息す。至りて今も残りし丹砂を、焼干するも成就せず。」の「焼干丹砂」(「焼丹」)を初めとして、「五石散」などの鉱物薬の服用は、遠く秦漢代より始まり当時も依然として流行していた。居易自身はその効果に疑問を持ちながらも、病身であつ

ただけに薬をも継る想いがあつたのであろうか。「海漫漫」(卷三)⁽¹⁸⁾の「山上 多く不死の薬を生じ、之を服すれば羽化して天仙と爲る。」にも窺える。

「焼丹」についても少し考えよう。丹とは丹砂(HgS)であり、焼くことにより水銀に変わる。このことは『抱朴子』の「丹砂之を焼きて水銀と成り、積變してまた丹砂に還成する。是なり。」の記述のように、赤い固体の朱砂から液体の白い水銀に相互変化するということから、変化と回帰という性質に基づいて身体の若返りが可能になると考えるのである。

森立之復元の『神農本草経』の記述は、丹砂は「精神を養い、魂魄を安んじ、氣を益し目を明らかにし、魅邪惡鬼を殺精し、久服すれば神明に通じ、老いず、能く化して汞と爲る。」、また水銀は「金銀銅錫の毒を殺し、鎔化して復た丹に還ると爲す。久服すれば神仙不死である。」とある。各生薬の記述末尾部分の詳細に関しては、森立之『本草経攷注』⁽²⁰⁾を註記する。

「焼丹」を試み失敗した記述はよく見られるが、結果としてそれは水銀中毒を回避したことになり良かったのである。しかしそれ以外の道教関連の薬物は服用していたようである。例えば若年の頃の詩に見られる「紅消散」「碧雲英」など。前者は『洞天奥旨』に見られ、癰を治す為のものである。後者は不明であるが、碧英とは道教内煉名詞で津液のことを云う。また居易は病弱なぶん種々の薬物の使用が見られ、地黄粥などの薬膳的用法も試みていたようである。医薬関連を始め、外丹、採薬などに関しては道士の影響が大きかったであろう。特に雲母の服用は続いていたふしが窺われる。六十三歳の時の「既に雲英を服す」(卷三十一 早服雲母散)⁽²¹⁾や七十一歳の時の「雲液六腑に洒みる」(卷三十六 對酒閑吟、贈同老者)⁽²²⁾、また年齢は不明だが、「朝に雲母散を餐し、夜に瀋精を吸沆す。」(卷一 夢仙)⁽²³⁾や「一匙の雲母粉」(卷七 宿簡寂觀)⁽²⁴⁾の記述が見られる。

雲母の薬効を『神農本草経』には「中風寒熱、車船上に在るが如きを治し、邪氣を除き、子精を益し、目を明らかに

し、久服すれば身は軽く、延年す。」とある。『本草経攷注』の詳細を註記する⁽²⁵⁾。後述するように、眼疾患や風痺に伴う眩暈などに悩んでいた居易にとつて、雲母の薬効は魅力的であつたのだろう。

『神農本草経集注』を編纂したことで知られる陶弘景は道家でもあり、彼が著したとされる『真誥』を居易が読んでいたと思われる詩「歯を叩き晨興き秋院静か、香を焚き宴坐し晚窗深し。七篇の眞誥仙事を論じ、一卷の壇経佛心を説く。」(巻二十三味道)に見られる「叩齒」も明らかに道法である。仏教と道教を同じように扱うことは、両者に対等の価値を見出していることであろう。

このように薬物の服用という面に限らず、精神的にも儒仏道三教が居易の意識下に包涵され、儒家の「天命」、道家の「逍遙遊」、佛家の「四大皆空」により安慰の氣持ちを抱いていたのであろう。このことは彼が病弱にも拘わらず比較的長生できた最大の理由である。金谷⁽²⁶⁾は居易の人生指向を「人生の實事はこれ歎娘」(巻六十六老父)などを引き、現実生活を快適にすること、名利を求めることの余りの激しさといった、老年まで衰えなかつた激しい歎娘追求に置き、これが閑適の境を慕わせることになつたと共に、儒仏道三教の思想もそれぞれの立場からこの一貫した欲求に役立てられたものと云う。そして多数の詩作を爲した源泉もこの歎娘の追求と関連づけ、更に年寿や健康への配慮も繊細な感じやすい詩人の心を示すもので、純粹なまごころで眞実の生き方を求める人であつたと見なす。

疾病について

白居易の疾病史は初期の詩作に「久しく勞生事を爲し、攝生道を学ばず。年少已に多病、此身豈老に堪えん。」(巻十三病中作)と記されている。この詩には自注が付き「時年十八」とあり、年少期より体弱多病であつたことが解る。既に記したように二十一歳で弟を、二十三歳で父を失つており、「二十已来、昼に賦を課し、夜に書を課し、同じくまた詩を課し、寢息の遅あらず。以て口舌に瘡を成し、手肘に胝を成すに至る。既に壯となり膚革に盈豊ならず、未だ老ならざる

に齒髮早くも衰ろえ白し。」（卷四十五與元九書）とある。

上述したように、多分母親から先天の腎精を十分に得られなかったことが、蒲柳の質であった大きな理由と考えられ、また親族・友人など多くの死との関わり、職務上の悩みなどによる七情内傷も大きな影響をしていたであろう。更に飲酒と生活環境の悪さ（寒さ、多湿、清貧）は病状の悪化に作用したため、居易自身も「新たに藥草を合和し、舊方書を尋檢す。」（卷八病中逢秋、招客夜酌²⁷）と医書を読み対応していたようである。では個々の疾病について考えてみよう。

一、眼 疾

眼症状の記述は第一期の終盤、四十前半の時の詩「眼を病みて昏きこと夜に似たり」（卷六答卜者²⁸）や「書魔兩眼を昏くす」（卷九白髮²⁹）に見られ、さらに興味深いのは四十三歳の時に友人から来た見舞いの手紙に対する返事に「黃連を點盡するも尚未だ平かならず。」（卷十四得錢舍人書問眼疾³⁰）とある。この点眼藥として用いた黃連は火熱を清する藥である。つまり眼症状の原因は炎症にあると考えていたことになる。この炎症がいかなる原因によるものかを検討すると、「眼痛燈を滅し猶闇に坐す」（卷十五舟中讀元九詩）とか、四月に進士考試に絡む事件をきっかけとして「兩李党争」が起こり遷延した時期である五十歳の時の「黒花眼に滿つ」（卷十九自問）や、五十五歳の時の詩「空中に散亂す千片の雪、朦朧として物上に一重の紗……醫は風眩にして肝家に在りと言う。」（卷二十四有眼病二首の第一首、更に「眼の藏損傷來りて已に久し、病根牢固にして去應し難し。醫師盡く先ず停酒を勧めめる。……合中に決明丸を虚撚するも、人間の方藥應じて益無し。」（同、第二首）というより詳細な記述が有る。

以上をまとめると、眼痛があり、多数の雪が舞うように眼花が有り、紗がかかったように霞み、医師は肝を主病因とする「風眩」であると言ひ、禁酒を勧告し、決明丸を飲めと言う。今井は眼科医萱沼の近視と眼精疲労説を引用するが、如何なものであろうか。中医学的にはこれは氣鬱を背景とする「肝火上炎」であり、「素問」陰陽應象大論篇の「肝は目

を主る」ことから、肝火はもろに目に影響する。金代の著名な医家の一人劉河間は「目昏きて黒花を見るは、熱氣甚しきに由りて之を目に發す」と説き、また倪仲賢は「怒甚しく肝を傷れば、……其病眇泪無く痛痒差明し、緊澁の證、初めは但だ昏く霧露中を行くが如く、漸く空中に黒花有り。」と云う。このように見れば、白居易の眼症状はおおむね「肝火」で説明が出来る。ちなみに詩中に云う、医師が診断した「風眩」とは風熱眩暈のことで此処では妥当しない。風熱眼痛（或いは風火眼痛）のことであれば、治法に黄連水を点眼することも古來行われており問題ない。「風眼」の誤記であろう。

しかし単なる氣鬱による肝火と見なすのではなく、宋代の名医許叔微が言うように

素問に曰く、久視すれば血を傷り、血は肝が主る。故に勤書して則ち肝を傷れば、目昏を主り、肝傷れば則ち自から風熱を生じ、氣は上騰し目昏に到る。亦た補薬を専服するは可ならず、但益血鎮肝明目薬を服すれば自癒す。

居易の体力を考えると、清肝火のみでなく補血にも配慮する許叔微の考えが妥当であるといえよう。つまり居易の眼症状は根本に全身的な氣血不足があり、それゆえ心肝の氣血も不足し、一層情緒的に不安定となり肝氣鬱結し、鬱久化火で火を生み、眼痛、眼花、目昏、霧視などの症状を発現したと考えられる。

なお眼症状は五十九歳に眼花の記述を認め、以後見られないようである。老境に入り情緒的に安定し、座禅などによる精神の安寧が肝鬱を減らし、眼症状を緩解させたのかもしれない。

二、風痺について

初めて「風痺」の疾病を得たのは六十八歳の時である。「冬十月甲寅の旦、始めて風痺の疾を得る」（卷三十五病中詩十首並序の序）と記す。痺証とは神経痛、リウマチ、痛風などの疼痛疾患を云う。ここで「旦」つまり朝に症状が顕れたと云うことは、時間治療学の考えからすると、病因は風邪、氣滯、熱邪などの陽邪であらねばならない。従って中医

学の理論は後述するが、痺証の基本病因は風・寒・濕邪であるので、朝方に発症した居易の痺証の病因では「風邪」が直接的な発症誘因であり、背景因子として「寒・濕邪」の存在が考えられる。

そして続く第一詩（卷三十五初病風）には「肘痺は生柳に宜しく、頭旋劇しく轉蓬す。」続く第二詩には「風疾侵凌し老頭に臨み、血凝筋滞し柔調わず。……腹空き先ず松花酒を進む、膝冷え桂布裘を重装す。」（枕上作）とある。「松花」の作用は「心肺を潤し、氣を益し、風を除き止血する」また「血を養い熄風する」「風濕を除く」などと諸医書に記載がある。松花酒は『元和紀用経』に初載で「風眩頭旋腫痺、皮膚頑急を治す」と記されている。「桂」は温陽作用のある桂皮を革袋に入れ膝に当てたものであろう。

また翌六十五歳三月に漸く小康を得た時の詩には「風痺宜く和緩す、春來りて脚校（較）べて輕し。」（卷三十五春暖）とあるが、温暖の氣候で緩解したと云うことは、病因に寒邪が関わっていることを示唆する。ちなみに「中風痺之疾」（卷七十一畫西方幀記）とあるのは、もちろん中風の病ではなく、「風痺の疾に中る」^{あた}である。

では「風痺」とは何か、今井は「中風」と解釈しているがどうであろうか。中医学の基礎古典である『黄帝内経』を見よう。『素問』痺論篇第四十三に「黄帝問いて曰く、痺の安んぞ生ずるや。岐伯對えて曰く、風寒濕三氣雜して至り、合して痺と爲る也。其の風氣勝れば、行痺と爲し、寒氣勝れば、痛痺と爲し、濕氣勝れば、著痺と爲す也。」とある。このようにまず「痺」とは、風寒濕等の邪氣を受受することが前提にある。更にそれにより臟腑経絡氣血が痺阻して通じなくなり、肢体關節に疼痛酸楚、麻痺沈滞などの機能障害を引き起こし、氣機の昇降出入が阻滞して不暢となった状態を表す病証であると定義されている。

濕邪により症状が顕れると云うことは、体内に内濕があることが条件である。居易の場合その原因は飲酒と喫茶であり、「江南卑濕地に配向す」（『縛戎人』）、「露濕綠蕪地」（『酬張太祝晚秋臥病見寄』）、「湓江に近く地低濕に住む」（『琵琶行並序』）と表現されるように、江州、杭州、蘇州などの任地の湿度が高かったことも関与して居るであろう。

寒邪により悪化することは、裏寒（陽虚）状態があり而も寒邪が存在していることが原因である。いずれも問題となる基礎の病理は腎陽虚である。先天の本が少なく、幼少年期より多病であったことは、当然肺や脾胃といった後天の本のバックアップも少ないことが示唆される。結果として肺氣虚・陽虚、脾氣虚・陽虚があり、結局命門の火へのエネルギー補給が不十分となり、腎陽虚のみならず、腎精不足に至っていたであろう。

「風痺」とは、『靈枢』壽夭剛柔第六に「病陽に在るは、命じて風と曰い、病陰に在るは命じて痺と曰い、陰陽俱に病むは、命じて風痺と曰う。」、更に『靈枢』厥病第二十四に「風痺は淫の病。已む可からざるは、足は氷を履むが如く、時には湯中に入る如く、股脛淫し、煩心、頭痛、時に嘔、時に愧、眩已みて汗出で、久しければ則ち目眩し、悲以て喜く恐れ、短氣して樂しまず、三年を出ずして死す也。」とある。この記述は「病中詩十五首並序」の序に記されている症状に近似していることが解る。「不出三年死也」と書かれているのに、彼がこの疾病に罹患後も七五歳まで、ほぼ七年の余命を得たのは、まさにこの条文と反対の「悲しみを忘れ、喜よく恐れず、氣を詰めずた」からであろう。

『靈枢』本藏第四十七には「寒温和せば則ち六府穀を化し、風痺作さず。經脉通利し、肢節安を得る。」³³とある。

三、肺疾患

四十六、七歳の時、初めて肺を病み詩う「肺病みて酒飲まず」（卷七閑居、五十三歳の時「氣嗽寒に因りて發し、風痰雨を欲して生ず。…唯陰晴を卜して解せん。」（卷二十三病中書事）。この「寒邪により欬嗽が起り、風痰は雨ふらんとして生じ、晴れると良くなる。」ということは基礎に肺陽虚があり、それに寒湿痰が絡んでいることが示唆される。「風痺」の項での推測が当たっていることが解る。

ところで何故肺疾患を引き起こしたのであろうか、始めに触れたように、母や娘などの死による悲しみが「憂悲傷肺」し、肺を損傷したことは当然考えられる。さらに興味深い詩がある。同じく五十一歳頃の詩に「老いて齒去り衰え橋の

醋を嫌う、病は肺に來りて渴き茶香を覺ゆ。」（卷二十東院）とあるが、橘の酸味を嫌うということは、酸と関連する臓器は肝であるから、肝強状態であることを意味する。肝強⇨木強により、木火刑金となり、金⇨肺を剋する。肝火により肺にも火が生まれ、肺疾患を來すのみならず、結果として口渴となる。肝強の理由はイライラであろうから、ここでもストレスが引き金になって肺疾患を引き起こしていたことが解る。

4、老化について

居易三十五歳の時の詩に「白髮一莖生ず」（卷九初見白髮）とある。白髮の原因は必ずしも腎虚に限らず、血虚や痰湿の停滞なども考えられる。上記したように彼の場合先天の本である腎精を十分に得られなかつた可能性があり、さらに肺や脾胃といった後天のバックアップも不十分であつたとすれば、当然血虚にもなつていたのであろう。そして生活環境や食生活の関係から、体内に湿邪痰飲を溜めこんでいたことも考えられる。

結局白髮の原因は種々考えられるが、いずれにしろ先天の腎精が不足しており、後天のバックアップが少なければ、白髮に限らず全身の老化が早く進むことは自明である。更に心肝の氣血不足状態が有ることで、種々のストレスに対する過剰な反応が容易に起きる。引き起こされた氣鬱は全身の氣の流れの障害となり、当然氣のみならず血・津液全てに影響が及び、いわゆる瘀血や痰飲と呼ばれる病理状態を起す。これが五臟六腑の正常な機能を阻害することも当然であり、種々の疾病を起す。老化と密接な関連を有する腎の働きも低下させる悪循環が形成されることになる。『素問』上古天真論篇第一に、

丈夫八歳にして、腎氣實し、髮長く齒更まる。……五八にして腎氣衰え、髮墮ち齒槁れる。……六八にして陽氣上に衰竭し、面焦れ、髮鬢頽白たり。七八にして肝氣衰え、筋動く能わず、天癸竭き、精少なく、腎藏衰え、形體皆極まれり。八八にして則ち齒髮去り、腎は水を主り、五藏六腑の精を受けて之を藏す。故に五藏盛んにして乃ち能

く寫す。今五藏皆衰へ、筋骨解墮し、天癸盡きたり。故に髮鬢白く、身體重く、行歩正しからずして子無きのみ。と、老化に関する中医学の基本的考えは明らかである。

まとめ

- 一、白居易の詩作を通して、病弱多病を中医学的に分析した。
- 二、先天の腎精不足が考えられ、それは母親に起因するかと思われた。
- 三、風寒湿邪といった外因の影響が見られた。
- 四、政争、戦乱、行政官として人民の貧苦への心痛、親族・友人の多数の死去などによる七情内傷が大きかった。
- 五、飲酒や喫茶習慣が湿邪内蘊を引き起こし疾病関与に関わった。
- 六、仙薬に興味を持ち焼丹なども試みたが、実際年余に亘り服用したものに雲母がある。鉉物業ではあるが、重金属でなかったぶん副作用は少なかったかと思われる。
- 七、儒仏道三教による安寧が疾苦の軽減に寄与した。
- 八、眼病は肝火や血虚が主因である。
- 九、風痺の誘因は風邪であり、寒湿邪を内在したことが病因である。
- 十、肺疾患は木火刑金の結果であり、ストレスが主病因である。
- 十一、白髮、齒脱などの速やかな老化は、先天不足に後天不足が絡んだ結果である。

注

(1) 今井清「白楽天の健康状態」『東方学報』三六巻、三八九〜四二二頁、一九六四、京都大学人文科学研究所、京都

(2) 鎌田出「唐詩人の疾病観——白居易を中心として」、『都留文科大学研究紀要』三六卷一〇一〜一〇八頁、一九九二

(3) 松木きか「『長恨歌』と白樂天」、『内經』九四卷二〜六頁、一九九六

(4) 王拾遺著『白居易研究』三〜九八頁、上海文芸聯合出版社、一九五四、上海

(5) 王拾遺編『白居易生活系年』三〜三三四頁、寧夏人民出版社、一九八一、銀川

(6) 花房英樹『白居易研究』二〜一六一頁、世界思想社、一九七二、京都

(7) 下定雅弘「白居易研究の課題を考える」謝思煒『白居易集綜論』に即して、『白居易研究年報』創刊号、一七七〜二二五頁、二〇〇〇

(8) 『白居易集』卷一 慈烏夜啼

慈烏失其母、啞啞吐哀音。晝夜不飛去、經年守故林。夜夜夜半啼、聞者爲沾襟。聲中如告訴、未盡反哺心。百鳥豈無母、爾獨哀怨深。應是母慈重、使爾悲不任。昔有吳起者、母歿喪不臨。嗟哉斯徒輩、其心不如禽。慈烏復慈烏、鳥中之曾參。

(9) 卷十自覺二首

四十未為老、憂傷早衰惡。前歲二毛生、今年一齒落。形骸日損耗、心事同蕭索。夜寢與朝餐、其間味亦薄。同歲崔舍人、容光方灼灼。始知年與貌、衰盛隨憂樂。畏老老轉迫、憂病病彌縛。不畏復不憂、是除老病藥。朝哭心所愛、暮哭心所親。親愛零落盡、安用身獨存、幾許平生歡、無限骨肉恩。結為腸間痛、聚作鼻頭辛。悲來四支緩、泣盡雙眸昏。所以年四十、心如七十人。我聞浮屠教、中有解脫門。置心為止水、視身如浮雲。抖擻垢穢衣、度脫生死輪。胡為戀此苦、不去猶逡巡。回念發弘願、願此見在身。但受過去報、不結將來因。誓以智慧水、永洗煩惱塵。不將恩愛子、更種憂悲根。

(10) 『琵琶行』（『白居易集』卷十二）の序

元和十年、予左遷九江郡司馬。明年秋、送客湓浦口、聞舟船中夜彈琵琶者。聽其音、錚錚然有京都聲。問其人、本長安倡女、

嘗學琵琶於穆、曹二善才、年長色衰、委身為賈人婦。遂命酒、使快彈數曲。曲罷、惘默。自敘少小時歡樂事、今漂淪憔悴、轉徙於江湖間。予出官二年、恬然自安、感斯人言、是夕始覺有遷謫意。因為長句、歌以贈之、凡六百一十二言、命曰『琵琶行』。

そして詩の一部

同是天涯淪落人、相逢何必曾相識。我從去年辭帝京、謫居臥病潯陽城。
潯陽地僻無音樂、終歲不聞絲竹聲。住近湓江地低濕、黃蘆苦竹繞宅生。
其間旦暮聞何物、杜鵑啼血猿哀鳴。春江花朝秋月夜、往往取酒還獨傾。
豈無山歌與村笛、嘔啞嘲哳難爲聽。今夜聞君琵琶語、如聽仙樂耳暫明。
莫辭更坐彈一曲、爲君翻作琵琶行。感我此言良久立、卻坐促弦弦轉急。
淒淒不似向前聲、滿座重聞皆掩泣。座中泣下誰最多、江州司馬青衫濕。

(11) 卽事詠懷、題於石上(卷七)

香爐峰北面、遺愛寺西偏。白石何鑿鑿、清流亦潺潺。有松數十株、有竹千余竿。
松張翠傘蓋、竹倚青瑯玕。其下無人居、惜哉多歲年。有時聚猿鳥、終日空風煙。
時有、冥子、姓白字樂天。平生無所好、見此心依然。如獲終老地、忽乎不知遠。
架岩結茅宇、斫壑開茶園。何以洗我耳、屋頭落飛泉。何以淨我眼、砌下生白蓮。
左手攜一壺、右手挈五弦。傲然意自足、箕踞於其間。興酣仰天歌、歌中聊寄言。
言我本野夫、誤爲世網牽。時來昔捧日、老去今歸山。倦鳥得茂樹、涸魚返清源。
舍此欲焉往、人間多險艱。

(12) 卷十自覺一首之二

朝哭心所愛、暮哭心所親。親愛零落盡、安用身獨存、幾許平生歡、無限骨肉恩。
結爲腸間痛、聚作鼻頭辛。悲來四支緩、泣盡雙眸昏。所以年四十、心如七十人。
我聞浮屠教、中有解脫門。置心爲止水、視身如浮雲。抖擻垢穢衣、度脫生死輪。
胡爲戀此苦、不去猶逡巡。回念發弘願、願此見在身。但受過去報、不結將來因。

誓以智慧水、永洗煩惱塵。不將恩愛子、更種憂悲根。

(13) 「逍遙詠」(卷十一)

亦莫戀此身、亦莫厭此身。此身何足戀、萬劫煩惱根。
此身何足厭、一聚、空塵。無戀亦無厭、始是逍遙人。

(14) 「題贈定光上人」(卷九)

二十身出家、四十心離塵。得徑入大道、乘此不退輪。一坐十五年、林下秋復春。
春花與秋氣、不感無情人。我來如有悟、潛以心照身。誤落聞見中、憂喜傷形神。
安得遺耳目、冥然反天真。

(15) 津田左右吉「唐詩にあらはれている佛教と道教」『シナ佛教の研究』、四三五〜四七九頁、岩波書店、一九五七、東京

(16) 「仲夏齋戒月」(卷八)

仲夏齋戒月、三旬斷腥羶。自覺心骨爽、行起身翩翩。始知絕粒人、四體更輕便。
初能脫病患、久必成神仙。御寇馭冷風、赤松游紫煙。常疑此說謬、今乃知其然。

我年過半百、氣衰神不全。已垂兩鬢絲、難補三丹田。但減葷血味、稍結清淨緣。
脫巾且修養、聊以終天年。

(17) 「不二門」(卷十一)

兩眼日將暗、四肢漸衰瘦。束帶剩昔圍、穿衣妨寬袖。流年似江水、奔注無昏晝。
誌氣與形骸、安得長依舊。亦曾登玉陛、舉措多紕繆。至今金闕籍、名姓獨遺漏。
亦曾燒大藥、消息乖火候。至今殘丹砂、燒干不成就。行藏事兩失、憂惱心交斗。
化作憔悴翁、拋身在荒陋。坐看老病逼、須得醫王救。唯有不二門、其間無天壽。

(18) 「海漫漫」(卷三)

海漫漫、

直下無底旁無邊。雲濤煙浪最深處、人傳中有三神山。山上多生不死藥、

服之羽化爲天仙。秦皇漢武信此語、方士年年采藥去。蓬萊今古但聞名、

煙水茫茫無覓處。海漫漫、風浩浩、眼穿不見蓬萊島。不見蓬萊不敢歸、

童男髻女舟中老。徐福文成多誑誕、上元太一虛祈禱。君看驪山頂上茂陵頭、

畢竟悲風吹蔓草。何況玄元聖祖五千言、不言藥、不言仙、不言白日升青天。

(19) 坂出祥伸「隋唐時代における服丹と内視と内丹」『中国古代養生思想の総合的研究』五六六～五九九頁、平河出版社、一九八八、東京

(20) 森立之、郭秀梅、岡田研吉、加藤久幸校点『本草経攷注』(上) 七二～八一頁、学苑出版社、二〇〇三、北京
丹砂 久服通神明、

青霞子云「丹砂、自然不死、若以氣衰、血散、體竭、骨枯、八石之功、稍能添益。若長生久視、保命安神、須餌丹砂、且八石見火、悉成灰燼。丹砂伏火、化爲黃銀、能重能輕、能神能靈、能黑能白、能暗能明。一斛人擎、力難昇舉、萬斤遇火、輕速上騰、鬼神尋求、莫知所在。」

立之案 白青、乾薑條並云「久服通神明。」『吳氏本草』云「空青久服、有神仙玉女來侍。『御覽』引」蓋是久服通神明之謂也。『弘決外典抄』云「書云 篔竹未翦、則鳳音不彰 情性未練、則神明不發。」所謂練情性者、謂精神自養、魂魄自安也。精神魂魄自爲安養、而後神明之妙理始可通耳。『孝經』云「孝悌之至、通於神明、光於四海、無所不通。」又「右契」云「内藏不足爲神、外備觀不足爲明、惟孝者爲能法天之神、麗日之明。」神明之義、以此爲長也。『扁鵲傳』云「長桑君乃出其懷中藥予扁鵲、飲是以上池之水、三十日當知物矣。扁鵲以其言飲藥三十日、視見垣一方人、以此視病、盡見五藏癥結。」所云知物、視見垣外人、視見五藏癥結、並謂通神明也。

不老、

孫星衍云「按金石之藥、古人云久服輕延年者、謂當避、絕人道、或服數十年乃效耳。今人和肉食服之、遂多相反、轉以成疾、不可疑古書之虛誕。」

能化爲汞、

『備物志』曰「燒丹朱成水銀、則不類物同類異用者。」

立之案 水銀下云「鎔化還爲丹」、與此互文見義。

『抱朴子』曰「丹砂燒之成水銀、積變又還成丹砂是也。」

又案『說文』「瀆、丹砂所化爲水銀也。」高誘注『淮南』云「白瀆、水銀也。」『廣雅』「水銀謂之汞。」『太平御覽』及『嘉祐補注本草』、『本草圖經』引『廣雅』並「汞」作「瀆」。王念孫據改作「瀆」。瀆、汞古今字也、據此、丹砂、水銀子母一體耳。執七之際、或代用銀朱亦可。但天造者爲丹砂、人造者爲銀朱、自有精粗上下之分、猶石綠與銅綠之異耳。

水銀 鎔化還復爲丹。

陶云「還復爲丹、事出『仙經』。」徐靈胎曰「水銀出於丹砂中者爲多、故亦可、成丹石。金精得火變化不測、鉛汞皆如此。」立之案 丹砂下云「能化爲汞」、此云「還復爲丹」、文義互見、然則或用銀朱亦可。

久服神仙不死、

『藥性論』云「此還丹之元母、神仙不死之藥。」陶云「酒和日暴、服之長生也。」

徐靈胎云「丹家爐鼎之術、以水銀與鉛爲龍虎、合練成丹。服之則能長生久視、飛昇羽化。自『參同契』以後、其說紛紛、高名之士爲所誤者不一而足。夫水銀乃五金之精、而未成全體者也。凡金無不畏火、惟水銀則百、如故。以其未成金質、中含水精、故火不得而傷之。其能點化爲黃白者、亦因藥物所、變其外貌、非能真作金銀也。今乃以其質之不朽、欲借其氣以固形體、真屬支離。蓋人於萬物、本爲異體、借物之氣以攻六邪、理之所有 借物之質以永性命、理之所無。術士好作聰明、談天談易似屬可聽、實則伏羲畫卦、列聖繫辭、何嘗有長生二字、此乃假託大言、以愚小智。其人已死、詭云尚在。試其術者、破家喪身。未死則不悟、既死則又不知。歷世以來昧者接踵、總由畏死貪生之念迫於中、而反以自速其死耳。悲夫。」

(21) 卷三十一 早服雲母散

曉服雲英嗽并華、寥然身若在烟霞。藥銷日晏三匙飯、酒渴春深一碗茶。

(22) 卷三十六 對酒閑吟、贈同老者

雲液酒六腑、陽和生四肢。於中我自藥、此外吾不知。

(23) 卷一 夢仙

帝言汝仙才、努力勿自輕。卻後十五年、期汝不死庭。再拜受斯言、既寤喜且驚。

秘之不敢泄、誓誌居岩。恩愛舍骨肉、飲食斷羶腥。朝餐雲母散、夜吸沆、精。

(24) 卷七宿簡寂觀

名利心既忘、市朝夢亦盡。暫來尚如此、況乃終身隱。何以療夜饑、一匙雲母粉。

(25) 『本草經攷注』「雲母」の項

『抱朴子』云「服雲母十年、雲氣常覆其上、服其母以致其子、理自然也。」

中風寒熱、如在車船上。

岡邨尚謙云「如在車船上、言目眩也。」

立之案 如在車船上者、言風熱上泛、心氣不定、全身不鎮著也。目眩亦其一端也。

除邪氣、

『千金翼』「治熱風汗出、心悶、水和雲母服之、不過、再服、立愈。」

安五藏、

立之案「安五藏」者、言安鎮五藏之氣、乃鎮心之義。前文所謂如在車船上者、即五藏不安之證也。『抱朴子』有服五雲之法、

亦取五色以安五藏之義。

益子精、

立之案 子精者、腎家所畜之精、所以成子、故曰子精。益男子所得而施化者是也。『千金』治婦人絕產秦椒丸條云「盪滌府藏、

使玉門受子精。」可以證也。『藥性論』云「補腎冷。」

明目、

益子精、壯腎源、所以有明目之功。

久服輕身延年。

『抱朴子』云「他物理之即朽、著火即焦、而五雲內猛火中、經時終不焦、埋之永不腐、故能令人長生也。」

(26) 金谷治「白樂天の精神」『金谷治中国思想論集(上卷)』六〇七〜六二七頁、平河出版社、一九九七、東京

(27) 卷八病中逢秋、招客夜酌

不見詩酒客，臥來半月余。合和新藥草，尋檢舊方書。晚霽煙景度，早涼窗戶虛。雪生衰鬢久，秋入病心初。臥簟蕝竹冷，風襟邛葛疏。夜來身校健，小飲復何如。

(28) 卷六答卜者

病眼昏似夜，衰鬢颯如秋。除卻須衣食，平生百事休。知君善易者，問我決疑不。不卜非他故，人間無所求。

(29) 卷九白髮

白髮知時節，暗與我有期。今朝日陽裡，梳落數莖絲。家人不慣見，慙默爲我悲。我雲何足怪，此意爾不知。凡人年三十，外壯中已衰。但思寢食味，已減二十時。況我今四十，本來形貌羸。書魔昏兩眼，酒病、四肢。親愛日零落，在者仍別離。身心久如此，白發生已遲。由來生老死，三病長相隨。除卻念無生，人間無藥治。

(30) 卷十四得錢舍人書問眼疾

春來眼闇少心情，點盡黃連尚未平。唯得君書勝得藥，開緘未讀眼先明。

(31) 卷三十五病中詩十五首並序の序

六十有八。冬十月甲寅旦，始得風痺之疾，體癢目眩，左足不支，蓋老病相乘時而至至耳。……外形骸而內忘憂患，先禪觀而後順醫治。

ちなみに「癩、病也。」と『玉篇』にある。

(32) 小高修司「【シリーズ中医時間治療学】1、中国医学による診断治療への応用」、『漢方の臨床』四八巻、一〇八九〜一〇九四頁、二〇〇一

(33) 『靈枢』本藏第四十七

黄帝問于岐伯曰。人之血氣精神者。所以奉生而周于性命者也。經脉者。所以行血氣。而營陰陽。濡筋骨。利關節者也。衛氣者。所以温分肉。充皮膚。肥腠理。司開闔者也。志意者。所以御精神。收魂魄。適寒温。和喜怒者也。是故血和。則經脉流行。營覆陰陽。筋骨勁強。關節清利矣。衛氣和。則分肉解利。皮膚調柔。腠理緻密矣。志意和。則精神專直。魂魄不散。悔怒不起。

五藏不受邪矣。寒温和。則六府化穀。風痺不作。經脉通利。肢節得安矣。此人之常平也。

(34) 卷七 閑居

肺病不飲酒、眼昏不讀書。端然無所作、身意閑有余。
雞棲籬落晚、雪映林木疏。幽獨已雲極、何必山中居。

(35) 卷九 初見白髮

白髮生一莖、朝來明鏡裡。勿言一莖少、滿頭從此始。
青山方遠別、黃綬初從仕。未料容鬢間、蹉跎忽如此。

*『白居易集』は中国古典文学基本叢書の全四冊本、顧學頡校點、中華書局出版、一九七九年刊を用いた。

(中醫クリニック・コタカ)

A Study of Bo-Juyi's Disease

Shuji KOTAKA

Hitherto, Bo-Juyi has been known as a sickly poet. But analysis of his disease according to the traditional Chinese medicine had not been until this paper. So many factors affected his illness; especially the weak life power which he was given from his mother and the heavy load of stress he suffered were worsening factors. His habits of heavy drinking of alcohol and tea weakened his constitution by creating bad waters in his body-which normally would have protected the flow of Qi, blood and fluids. Therefore, he was susceptible to many diseases.